

「通訳」における難語への対応

袖川 裕美

1 はじめに

翻訳の諸相のひとつである通訳では、言語変換の際の制限や問題点にどう対処するのか。本稿はこれをテーマに論じる。

いわゆる翻訳には文章表現の翻訳と音声表現の翻訳があり、さらに音声表現の翻訳(＝通訳)は逐次通訳と同時通訳に分かれる。

逐次・同時通訳に共通の制限は「時間」である。聞いてすぐに訳出するので「じっくり考える」は許されない。同時通訳になると、それが一段と強化される。が、逐次通訳であっても基本は同じである。

と同時に「空間」上の制限もある。会議やビジネスの通訳では、会議場で話者と同じ空間にいないてはならないことが多い。放送通訳も放映のためにはスタジオに赴く。新型コロナ禍でzoom会議が増え、自宅のPCから通訳するスタイルも増えたが、通信の不備という別の「制限」が発生する恐れがあるため、zoom会議にもかかわらず、わざわざ企業やエージェントに出向く通訳者もいる。

その他、音声や機材の不備、話者側の難点(極端ななまり、資料の提供なし)などの制限が加わることもある。そして最後に通訳側の制限・問題がある。実はこれが最大の難題で、本稿ではこれを中心に論じる。

これらの制限のひとつひとつについて、さまざまな事例がある。例えば話者側の制限のひとつに、話者の強いなまりがある。現在、ロシアによるウクライナへの侵攻や、ガザでの戦闘が続いているため、BBCやCNNなどの海外のニュースではウクライナ語なまり、ロシア語なまり、アラブ語なまり、ヘブライ語なまりの英語が飛び交う。興奮して話していることも多く、音がとらえ切れない。通訳者泣かせである。

だが、問題なのは外国人だけではない。日本人でも、いわゆるお役人の書いた、10行以上も○のないような文章をそのまま読み上げる話者に出くわしたことがある。日本語でも何を言いたいのか分からず、通訳をした私は大変難儀した。

このように、事例には事欠かないが、詳しくは拙著(『同時通訳はやめられない』、『放送通訳の現場から―難語はこうして突破する』)を参照していただければ幸いである。

2 通訳側の制限と問題点

では、通訳側の問題について、まず手法(逐次通訳・同時通訳)のもたらす制限から

論じよう。

ご存じのように、逐次通訳では話者が数センテンスからワン・パラグラフくらい話すごとに、通訳者が訳すという形式を取る。時間がないながらも、訳出に多少の工夫をする余地がある。際立った例としては、元の言語と対象言語の構成を変えることもある。

日英通訳（日本語から英語へ）の場合を考える。もともと日本語は結論が文末にくるうえ、日本人は結論を最初に明示して対立色を鮮明にするのを嫌う傾向があるため、語尾を濁したり、声を吞んだりしがちだ。話している最中に、何を言いたいのか、相手側にいわゆる「忖度」してほしいのである。そうした傾向が強く出た日本人の発言をそのまま訳しても、英語圏の人には理解しにくい。私は、時には、思い切って結論を先に示して理由は三点あるなどというように構成を変えることもある。この方法は、論点が明確になって議論の進展につながるが多いことから、概ね好評であるが、一方で「そこまでなくてもいい」と異を唱える人もいて、何を「等価」とするか議論の分かれるところである。

一方、同時通訳は話者の話を聞きながら、数秒前に聞いたことを訳出しながら追っていく形式をとる。時間的余裕はなく、考える余地が著しく狭まる。物理的に全部を訳出しきれないこともあって（これをしたら、早口すぎて何を言っているのか分からない）、ところどころ要旨をまとめて意識することも必要になる。いわば編集しながら訳をするのである。このことは大きな制限ではあるものの、一方で要旨が伝わりやすくなることもある。これも「等価」という観点から議論の対象になるであろう。

次に、通訳プロセスにおける最大の制限・問題点となりうる通訳者の技量について論じたい。通訳者には、外国語力（情報伝達型の語学力。会話型ではない、やや硬い英語力）、母語力（日本語力。外国語が母語を超えることはない）、専門知識や教養、発声・話し方、想像力・機転などが求められ、それぞれの要素が不十分であると、通訳に支障をきたす。

3 通訳者の仕事と等価

ここで、通訳行為とは何なのか、改めて定義しておく。「情報および話者の意図を伝える訳語を瞬時に選択して、発話すること」であると考えている。言い換えれば、通訳における「等価」とは「情報＋話者の意図」の訳出である。

一般に、通訳というと一特に同時通訳では単に機械のように言葉を置き換えると思われがちだが、これは全くの誤解である。理解できないことは訳せず、文章も構成できない。話者の意図は伝えられない。機械翻訳やAIとは違う。情報伝達だけなら、機械やAIのほうが優れているのかもしれないが、通訳者の理解・解釈が入るこの点こそ、人間ならではの行為であり、機械やAIを超える点であろう。

また、通訳されたものは、文学作品の翻訳とは違って独自の作品ではないし、作品であってはならない。主役はあくまで話者である。

これらのことから、通訳行為とは、異なる言語における話者のスピーチの再生、再構築といえよう。

4 難語の対応

最後に、通訳者の技量のなかでも、特に障害となりうる外国語・英語力について、自著の『放送通訳の現場から一難語はこうして突破する』(2021) から例をあげて論じた。本著は、私が放送通訳の現場で訳に窮した言葉やフレーズを取り上げて解説し、それらがどういう場面で使われているかについて、背景説明を加えたものである。

その中で、本稿では今日性の高いMAGA、FOMO、ecosystemに焦点を当てることとする。

● MAGA

本著のなかでは「trumpifyとde-trumpify まだまだ続くTrumpの影響？」という項目に入っている。執筆したときはトランプ前大統領が2020年の大統領選に敗れた直後だったため、トランプ氏の影響力がどこまで続くのか不明だったが、トランプ氏は今や2024年の大統領選で再び咲きを狙える位置にいる。

MAGAはMake America Great Again. (アメリカを再び偉大に) の頭文字をとったもので、トランプ氏の一期目の大統領選のスローガンだった。しかし、実はこの言葉は、共和党のレーガン元大統領が1980年の大統領選のときに使った”Let's Make America Great Again” (アメリカを再び偉大にしよう) をベースにしたものだ。トランプ氏に関してはその強烈な個性とあいまって、他にもさまざまな言葉が生み出された。

- ・Trumpism(トランプ主義)
- ・trumpify トランプ氏(主義)の影響力を強める
- ・de-trumpify トランプ氏(主義)の影響力をそぐ
- ・trumpy トランプ的な trumpiest もっともトランプ的な
- ・MAGA movement トランプ支持運動。

反移民、反多文化、反同性愛、反グローバリゼーション、経済の保護主義、人種・性・宗教差別(イスラム入国禁止)、反主流メディア、激しい党利党略、をも意味する。

- ・MAGA-hatted supporters MAGAと書かれた赤い帽子をかぶったトランプ支持者。赤は共和党のシンボルカラーである。

画像1) *The Economist*(February 17th-23rd 2024) の表紙

この画像はMAGAを使った*The Economist*の表紙で、世界の民主国家で強権的な右派勢力が台頭していることを表わしている。帽子には、Make America, Hungary,



Italy, France, Israel, Germany, The Netherlands, Poland, Great Again (アメリカ、ハンガリー、イタリア、フランス、イスラエル、ドイツ、オランダ、ポーランドを再び偉大に)と書かれている。なお、*The Economist*の表紙は抜群の表現力で世界的に評価が高く、大変面白いものが多い。

私がMAGAに最初に遭遇したときはCNNであったと思うが、何のことか分からず、しばらくは訳語を当てられなかった。そのうちMAGAと書かれた赤い帽子をかぶったトランプ自身が画面に出てきて、はっとした覚えがある。キーワードが分かれば一気に視界が開け、訳出が可能になる。

さらに関連する情報を加えると、経済界はTrump putという対策を打っていると言われる。本来putは価格が安くなったときに、あらかじめ決められた価格での売却が可能な金融商品を指し、これにより損失を回避する。Trump putは、「トランプ政権が復活した場合の打撃を和らげるための対策」を意味する。米国のみならず世界中がトランプ復活に身構えているのが窺える。

日本のメディアはこうした身構えについて、「もしトラ」、「ほぼトラ」(likely Trump)という言葉を使って盛んに報道している。当初、私は最初に英語の表現があり、それを日本語訳しているのかと思ったが、そうではなくて、これは日本独自の表現だった。そして、しばらくすると今度はアメリカのメディアがこの言葉を取り上げるようになった。4月6日付のWashington PostでMoshi-toraという言葉が出て話題になった。`Moshi-Tra:’ In Japan, anxiety grows over Trump’s possible {victory or return}. (もしトラ：トランプ勝利の可能性に不安高まる日本) はネット記事の表題である。

これに関連して、*Time*の表紙(画像2)も興味深い。

画像2) *Time*(April 30 2024)の表紙。キャプションはIf He Wins「もし彼が勝ったら」で、文字通り「もしトラ」を表す。



● FOMO

こちらはFear of Missing Outの頭文字を合わせた用語。「取り残されることへの不安」を表し、心理学から金融までさまざまな世界で使われている。特にX(旧ツイッター)やフェイスブックなどのSNS(ソーシャルメディア)に四六時中つながっていないと取り残される、情報やチャンスを逃すという焦りや不安、恐怖を示し、2011年ころからアメリカでbuzzword(バズワード、流行語)となった。アメリカでも、いつでもどこでもSNSをチェックしている若者があふれている。

私は数年前に、あるホラー映画の評論で、The movie perfectly played into the FOMO factor (あの映画はFOMOファクターにぴったりとあてはまった)という解説があったときに、この言葉を知った。見逃してはならないという心理にかられる映画と言いたかったようだ。こちらも最初は意味がわからず、Fなのでfederalの略語で連邦政府関係かと思ったが、それでは意味が通じない。とりあえず「フォーモー」と発音しておいて、後追いで理解して後に訳を補強した。

この経験から、FOMOはアメリカの流行語だと思っていたら、最近では令和の日本でも使われているらしい。日経新聞の「令和なコトバ」というコラムで、情報洪水についていけない令和の若者の不安を表す言葉として紹介されていた。

加えて、その派生語としてJOMOも取り上げられていた。こちらはJoy of Missing Out。取り残されることに、逆に自分らしさを見出して楽しむという意味である。これはFOMOへの対抗軸として提唱されたもので、2015年に出された*The Joy of Missing Out: Finding Balance in a Wired World* (Christina Crook 著) (見逃す楽しさ：つながり続ける世界でバランスを取る) という著書が元になっている。

それにしても、よく考えてみると、FOMOもJOMOも他者の目を意識した心理である。同調圧力の強い日本の「令和なコトバ」ならまだしも、元々独立心が旺盛で、他と違うことをよしとするアメリカの若者の現状を表す言葉だというのは驚きである。SNS時代の世界的な現象といえるだろう。

● ecosystem

気候変動が身近に感じられるようになり、地球温暖化とそれがもたらす生態系(ecosystem)の破壊といった問題が頻繁に論じられるようになった。

しかし、気づいたらecosystemは社会科学やビジネスの場でも使われるようになっている。私がこうした用法で最初に出会ったのはdisinformation ecosystem。トランプ信奉者の世界を示す言葉である。ニュアンスがつかめず、「誤情報のエコシステム」としておいたが、訳語としては正しくとも、果たしてこれで聞いた人が分かるだろうか。

「生態系」とは、自然界で生物や植物が互いに依存しながら生命を維持する仕組みを表す言葉だそう。つまり、disinformation ecosystemとは誤情報に満ちた閉ざされた系、誤情報に依存しながら支え合っている世界ということになる。

この使い方が新鮮だったので、自著で取り上げたのだが、最近では、日本人の有識者もテレビや新聞でさかんに「エコシステム」を使っている。特別な意味合いはなく、「世界」や「社会」のことを、ちょっと気取って、おしゃれ感、知ってる感を出して言っているのかと思ったら、エコシステムは現在では立派なビジネス用語になっているという。「製品や企業が互いに、連動、補完し合い、生態系のような相乗効果を生み出す」ものがエコシステムだという。だが、この言葉を使う有識者のすべてがビジネス用語として使っているわけではないようなので、「エコシステム」が一種のトレンドになっているのであろう。

● その他

① narrative

こちらは自著で取り上げていないが、いつの頃からかBBCやCNNでnarrativeという言葉が盛んに使われるようになった。その影響は日本でも顕著で、有識者がテレビで「ナラティブ」と言っているのをよく耳にする。意味するところは「物語」「話」「説明」であるが、似たような言葉のstoryとは微妙に違う。なぜnarrativeが使われだしたのか、まだはっきりしたことは言えないが、個人的に注目している。私見ではstoryは論理や骨格がはっきりしているが、narrativeはもっと緩いという印象を持っている。本学会は表現学会なので、narrativeはよく使われる語であろうと思い、中途半端ながら提起しておきたいと思う。

② Generation Z

Z世代という言葉があるが、これが略されてGen-Z(ジェンジー)、Gen-Zersと言う。初めて聞いたときは中国の地名かと思ったが、それでは意味をなさない。この言葉についても、やがてはとするとするパターンを辿った。

5 まとめ

本稿は「通訳では、言語変換の際の制限や問題点にどう対処するのか」をテーマに論じてきた。自著でも「難語はこうして突破する」と銘打っている。だが、現実には「こうすればトッパできる」というようなノウハウがあるわけではない。

実際は、意味が明らかになるまでリスクの高い単語の訳は控える、待つ、カタカナ語でとりあえず凌ぐ。通訳は意図を伝えるのが目的なので、要旨を伝えることで当座は乗り切る。もちろん、同時通訳をやりながら辞書を引くというようなこともする。通訳現場では休憩中も資料をめくり、ネットを駆使し、情報を確認して、不完全な理解が補い、後の通訳につなげていく。

また、時間的制限は厳しいながらも、熟達するにつれ、一瞬のスキマを利用して言葉を選ぶようになる。同音異義語が少なく、聞いてすぐに意味が分かる大和言葉を使ったり、重厚感のある四字熟語を使ったりしてimpactのある訳出を心掛ける。ただし、大和言葉は尺(訳出に使う時間)がかかるので多くは使えない。

安易なカタカナ語は避けるべきだが、無理に日本語に言い換えないほうがいい場合もある。加えて、ヤコブソンの「翻訳」の分類の言語内翻訳のようだが、たとえば英語のsensitiveを「繊細な」と訳さずに、「デリケートな」という別のカタカナ語に訳すなどというのも時には効果的である。

通訳独自の文法はない。文法という発想は興味深いが、そもそも訳出例文の収集が困難なので構築は難しいと思われる。自分が関った会議であっても、機密や著作権の問題があり、会議の主催者側も他の通訳者も、録音した通訳を資料にすることは認めない。テレビの放送通訳は公共性があるが、通訳者には著作権があり、即時性の高い仕事なので、小さなミスが生じがちなことから、研究のために自分の通訳を使ってもいい

いという人はほとんどいない。

しかしながら、文法の構築は難しくとも、通訳者にありがちな話癖を明らかにすることはプラスになる。何等かの形で体系づけられれば、個人的に獲得するしかなかったスキルが共有化され、スキル獲得に寄与するであろう。

最後に締めくくりとして、通訳の醍醐味について触れたい。

通訳は一発勝負で本番に臨むアスリートのような仕事で、それに、職人的な修練で臨む。緊張はあっても、これを伝える訳語が自然に湧き出てくるときは快感である。時にはbigな著名人にも出会える。

また、通訳界の先駆者のひとりである小松達也氏は、「ジャーナリストはthe first page of history(歴史の最初のページ)といわれるが、実は通訳者はそれより一步早く、歴史的出来事に遭遇できる。誰よりも早く情報に触れられる」と言われた。

MAGAをいち早く知ることが面白いのである。

付記

AIの進化で、AIによる同時通訳も可能になりつつある。通訳には情報伝達型の英語力が必要であると述べたが、専門用語も含めた情報だけなら、AIのほうが正確かもしれない。AIのほうが、等価性が高いという人もいるだろう。愕然とすることながら、人間が、知性の主要部分を占める情報と論理をAIに譲らざるを得なくなる日が来るかもしれない。そうなったら人間に残るのは感情だけになるのか。しかし、よく伝わるコミュニケーション、説得力のあるコミュニケーションとは、アリストテレスの言うlogos論理、pathos感情、そしてethos人間性で成り立っている。同じ言葉を使っても、言う人によって伝達力が違うのは話者の人間性ゆえである。

さらに人はウソをつく。ときに相手のウソや言い訳を「ウソ」と見抜きながらも、言葉のうえでは気づかないふりをしつつ、相手の「ウソ」を前提で物を言ったりもする。こういう複雑なコミュニケーションは極めて人間的であり、実は気づかぬうちに頻繁に行っている。これらを考えると、話者の意図を伝えるのは人間だと思わざるを得ない。

優れたコミュニケーションの柱となるのが、論理・感情・人間性であるのと同様、通訳もこの三点が核となる。話者と通訳者の論理のレベルはAIがカバーできたとしても、話者(＝表現者)と通訳者(≡表現者)の感情と人間性はカバーできない。

参考文献

小松達也(2005)『通訳の技術』研究者

袖川裕美(2016)『同時通訳はやめられない』平凡社新書

袖川裕美(2021)『放送通訳の現場から—難語はこうして突破する』イカロス出版

福光恵(2024)『「FOMO 取り残されるの、怖い？」令和なコトバ』日本経済新聞

2024年1月22日夕刊

ルース、エドワード (2024) 「『前大統領になびく米経済界』FINANCIAL TIMES」 日本経済新聞 2024年2月2日朝刊

エコシステム、Retrieved from ビジネスで圧倒的強さをもたらす生態系「エコシステム」とは？：日経ビジネス電子版 (nikkei.com)

CROOK, Christina (2015) *The Joy of Missing Out: Finding Balance in a Wired World*, New Societies Publishers; Illustrated Version

SELESKOVITCH, Danica (1968 in French) (1978 in English) *INTERPRETING FOR INTERNATIONAL CONFERENCES Problems of Language and Communication*, Translated by Stephanie Dailey and Eric Norman McMillan, Pen and Booth

“THE RIGHT GOES GAGA Meet the Global Anti-Globalist Alliance,” *The Economist* (February 17th-23rd 2024) , The Economist Newspaper Limited. Cover and p.9

YE HEE LEE, Michelle (2024) retrieved from 'Moshi-tora: In Japan, anxiety grows over Trump's possible return - The Washington Post April 6, 2024

“If He Wins,” retrieved from Donald Trump on What His Second Term Would Look Like | TIME (April 30, 2024)

(関西外国語大学)